

周司あきら著 (大月書店、2025年)

ラディカル・マスキュリズム 男とは何か

福永 玄弥*

台湾では近年、中国との軍事的緊張の高まりを背景に徴兵制度の再編が進行している。そのなかで焦点化しているのがトランスジェンダーの兵役区分の見直しである。従来、トランスジェンダーは「性心理異常」という病理化されたカテゴリーを割り当てられて兵役を免れてきた。ところが2025年12月に公表された修正案は、トランスのカテゴリー内に差異を持ち込み、法的性別が「男性」のままのトランス女性やノンバイナリーを「代替役」¹へ再分類する方向を提示した²。重要なのは、この修正案がトランスの兵役参加を「権利」として——すなわち規範的な「男性」カテゴリーへの包摂を——承認する措置というよりも、いかなる身体を軍事動員可能なものとして捉え直し、国家の人的資源（義務と権利で紐づけられた「国民」）へと再配置するのかといった統治の論理として構想されている点である。修正案に対しては、性的マイノリティ団体から、制度的保護が不十分なままトランス女性やノンバイナリーを男性組織に強制的に包摂することに対する懸念が表明されている。

ここで争点化しているのは、単に「男性兵士」の定義ではない。兵役が国民の義務であると同時に、国家への帰属や成熟した市民性、それらに紐づけられた特権、そして保護と犠牲の配分をめぐる資格を編成する制度である以上、だれを兵役へ包摂し、だれをそこから排除するのかという問いは、実質的には「だれが男であるのか」をめぐる政治的決定にはかならない。周司あきらが『ラディカル・マスキュリズム』をとおして執拗に問いに付すのも、まさにこうした水準である。本書は、男らしさや男性性という規範をめぐる蓄積されてきた旧来の男性学の議論を参照しつつ、それらが問うてこなかった問い、すなわち「男であること」そのものがいかなる制度的・社会的・身体的

条件のもとで成立しているのかをラディカルに問う試みである。

本書の最大の特徴は、「男性性（男らしさ）」と「男であること」を切り分ける視座にある。男性学はこれまで、暴力的で支配的な「男性性」への批判、あるいはそれに代わるケア志向的・平等主義的な男性像の模索を重要な課題としてきた。しかし、そのような議論はしばしば「だれが男としてみなされるのか」「男とはなにか」「男の身体」というものがありうるのか」という、より根底的な問いを後景化してきた。本書が切りひらくのはこの死角である。「男性性」と「男であること」の区別を明確にし、トランス男性の経験や語りを議論の柱の一つに据えることによって、著者は「男」というカテゴリーそれ自体が自然でも自明でもなく、つねに境界づけられ、維持され、争われてきたものであることを示そうとする。第2章で身体、ペニス／ファルス、性別の一貫性、徴兵制へと議論が展開されるのも、こうした問題設定の延長上にある。

このような構成は、男性性をめぐる議論を自己修養という倫理的な次元に閉じ込めない。たとえば「有害な男性性」を批判し、「よりよい男性性」を構想することは重要である。しかしその試みが、カテゴリー自体の政治性にまで踏み込まないとすれば、結果として「男」という位置の制度的安定性を温存することにもなりうる。本書は、まさにこの点をラディカルに問い返すのだ。「男であること」を所与の属性ではなく、社会制度と身体規範の交差点において成立する配置として捉え直すことによって、男性学の前提そのものを組み替えようとしているのである。

第3章以降で展開される男性運動論も、本書の意義をよく示している。メンズリブ、男性学、ヘテロセクシズム批判、インターセクショナルリティ

* 東京大学教養学部附属教養教育高度化機構 D&I 部門准教授

をめぐる議論に加えて、旧来の「マスキュリズム」や父親運動、さらには右派のジェンダー・バックラッシュや自民党政権までもが、広い意味での「男性運動」として読解の対象に置かれている点は注目に値する。ここで著者が示しているのは、フェミニズムに接近しつつ男性の自己変革を志向する実践も、逆に女性差別や反フェミニズム言説を動員する保守・右派運動も、ともに「男」をめぐる再編の局面として把握しようという視座である。男性性の危機や再定位を語る言説は、解放の契機にも、反動の契機にもなりうる。本書はその両義性を見据えている。

もっとも、この点は同時に、評者が本書に対してさらに議論を促したい箇所でもある。右派運動を「男性運動」として把握することが理論的にも実証的にも有効であることは、評者も同意する。ただし、その際には、今日の反ジェンダー運動や男性性の保守的な再編が、単なる男性不安の表出ではなく、新自由主義や帝国主義、ナショナリズム、宗教勢力、安全保障の再編、さらには地政学的危機管理と結びついた一連のプロジェクトでもあることを、より明示的に捉える必要があるだろう。また、ジェンダーバックラッシュや保守運動が男性によって象徴＝代表されることで、これらに参与してきた女性たちの声や存在が不可視化されてしまうことを看過したり過小評価すべきでもないだろう。

終盤で展開されるミサンドリーの議論は、本書の理論的独自性をさらに際立たせている。とりわけミサンドリーを、通俗的な「男性差別」言説としてではなく、家父長制が男性自身の内部に刻み込む嫌悪、自己疎外、同性間の暴力や序列化を照らし出す契機として捉え返そうとする姿勢は重要である。従来の議論ではミサンドリーが不可視化または過小評価されてきたことを指摘しつつ、家父

長制を打倒するために有効な概念としてこれを捉え返そうとする視点は、男性学のアプローチと家父長制批判とを和解させるためのひとつの理論的試みとして評価できるだろう。

本書の学術的意義は、男性学の更新という範囲にとどまらない。むしろ、「男性性」の批判と「男であること」の問い直しとを峻別し、そのあいだに横たわる身体、制度、国家、運動、感情の諸次元を一つの問題系として編み上げようとした点にこそある。男であることは、もはや自然でも自明でもない。それは、だれが国民として承認され、だれが徴集され、だれが保護され、だれが排除されるのかをめぐる政治的編成のなかで、つねに作り変えられている。本書は、その事実を「男」の側から引き受けるための、きわめて刺激的な介入である。男性性をめぐる議論が、いまなお反動の磁場のなかで揺れ動いている現在、本書は、「男であること」を閉じた特権ではなく、解体と変容に開かれた問いとして再構成するための重要な一冊として広く読まれるべきである。

注

- 1 代替役(替代役)とは、兵役対象者が軍務に代えて政府機関や公共部門で社会服務・技術支援などをおこなうことで、兵役義務を履行する制度である。民主化を背景に2000年に導入された。
- 2 法的性別を男性から女性へ移行したトランスジェンダーは、従来と変わらず兵役免除とされている。

参考文献

- 福永玄弥, 2025, 『性／生をめぐる闘争——台湾と韓国における性的マイノリティの運動と政治』明石書店。
- 鈴木彩加, 2019, 『女性たちの保守運動——右傾化する日本社会のジェンダー』人文書院。